
帰れ

みえさん。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
帰れ

【Nコード】
N0814S

【作者名】
みえさん。

【あらすじ】
テロリストの実動部ガイルと、一人の少年の話。

「帰れ！」

男は少年の襟首を掴むとそのまま外に放りだした。

よれた服を着た少年は服を直しながら大男を睨んだ。

似合わないスーツを着た大男は少年を睨み返して怒鳴る。

「お前みたいなイエローが来るような場所じゃねーって何度言ったら分かるんだよ」

「……」

少年は無言のまま男を見上げている。

黒い髪に茶色い瞳。低い鼻と柔らかい顔立ちは東洋系の血が混じっているのがすぐに分かる。この辺りに来た日本人が抱いた娼婦が産み落とした子だろう、と周囲は噂している。口のきけない少年だから誰も本当の名前を知らない。いつも黒いセカンドバックを抱えている少年は、「二世」という皮肉も込めてセカンドと呼ばれている。

少年がこの屋敷に初めて訪れたのは二週間ほど前のことだろうか。たまたま気まぐれでパンを投げた大男、ガイルに妙に懐いてしまい、未だに屋敷の周りをウロウロしている。

屋敷にいる少女を守る使命のあるガイルにしてみれば良い迷惑だった。

「今日も来ているみたいですね」

二階の窓からガイルと少年のやりとりを見ていた銀髪の男は小さく笑った。

「ガイルはあの形で子供に良く好かれる。どうしてあんな敵つい男に人気が集まるんでしょうね」

銀色の髪の男はガイルと同じようにスーツを着ている。背は高いが細身のため、ガイルと並ぶと優男に見えるだろう。だが、その身体は鍛え抜かれている。軍属経験あり、数多くの紛争に巻き込まれ

たこともあるのだろう。それを証明するかのように男の左目は眼帯に覆われ、その端からは古い切り傷のような跡が見える。

彼とは真逆の目に眼帯をした金髪の少女は彼の後ろから外を覗き込みくすりと笑った。

「確か、この間ナイフ使いの子供を連れてきたのも彼だったわよね」
「彼は十八でしたけどね。どうもアレは日系人に好かれる外見のようで」

「外見の問題かしら？」

考え込むように唇に手を当てた少女はくりと踵を返し、倍近くありそうな椅子に座る。まるで父親の書斎に遊びに来た少女が勝手に椅子に座ったかのようにだったが、それが彼女自身が座るべき場所だった。

この屋敷の主である、レイアが。

彼女は未処理の書類箱から書類を取り出して眺める。

「あら、父親は結構大物なのね。……あの子、戸籍は？」

「ありません」

「そう、なら問題はないわね」

男は瞬いた。

「……引き入れるおつもりですか？」

「彼に任せる。飼うのも使うのも好きにさせるといいわ」

「では、そのように？」

少女は頷く。

「ええ、伝えて頂戴」

がちやり、と屋敷の扉が開いてガイルは舌打ちをした。

振り向かないでも誰が出てきたのか分かる。

「すまねえ、口八。すぐ済ませるからよ」

「いえ、お嬢様からの伝言です」

「伝言だと？」

ガイルは振り向いた。

銀髪の男は口元に手を添え彼の耳に囁く。

一瞬、驚いたが、すぐにガイルは豪快に笑う。

ガイルが振り向くと尻餅を付いたままの少年はびくりと肩を振るわせた。

「お嬢の許可が取れた。来いクソガキ」

「……」

少年はセカンドバックを抱きしめたまま立ち上がって男の様子を窺った。

やれやれ、と言う風に口八が息を吐く。

楽しそうに男は笑い、子供の腕を掴むと半ば引きずるような形で屋敷の裏手の方に連れて行く。

地下にある射撃訓練所のドアを開けると、乱暴に少年を投げ入れた。

がちやり、と男は拳銃を引き抜く。

シリンダー式の銃だった。男はその銃口を少年の眉間に向けるにやりと、狂ったような笑みを浮かべた。

「お嬢はお前を好きにしろと言った。つまりは殺しても構わねえってことだ。お前も俺なんかにつきまとったのが運の尽きだったな。だから何度も消えろと言っていたんだ」

「……」

「せいぜい悲鳴を上げて楽しませてくれよ、ガキが」

ぱん、と鋭い音と共に銃口が火を噴いた。

少年の右頬を掠めるように銃弾が彼の隣を通り過ぎる。

セカンドは驚いたように瞬いたものの、悲鳴を上げることは無かった。ただいつもと同じように男を睨むように見つめている。

「悲鳴もでねえのかよ。つまらねえな」

ぱん、と今度は少年の左を銃弾が抜けた。

少年はやはり瞬いて男を見るばかりだった。

ぎり、とガイルは奥歯を鳴らした。

これだけ驚かせれば泣き出すのかと思っていた。泣き出せばここへ来させなくするのは簡単だと思っていた。

だが、この子供は泣き出しもしない。喚きもしないのだ。

（肝の据わったガキだ）

ガイルは熱くなった銃身に触れないようにズボンでシリンダーを回す。

ここは、表向きには幅広く事業を手がける民間企業だ。だが、実体としては違う。とても人には言えない事をしている組織の中枢なのだ。だからこんな何も知らない子供を巻き込む訳にはいかない。

だが、彼はどうやらこちら側の人間だ。

孤児である上に、口をきけないのだから飼い慣らせば自分の思うように動くコマになる。パン一つで懐く。もつと手なずけて銃を学ばせれば今からでも十分使い物になるだろう。レイアが許したのであれば、現時点で彼がどこかのスパイである可能性はない。

（間違いか、最善か）

彼は心の中でレイアの口癖をまねた。

ナイフ使いの少年を拾った時は迷わなかった。

それは妙な状況で知り合ったというのもあったし、彼自身望んだことでもあったからだ。何よりレイアが積極的な素振りを見せたから迷わなかったのだ。

だがこの少年はどうだろう。

今回彼女はどちらでもいいと言った。

この少年を放っておけばすぐに死ぬだろう。生き残ったとしても盗みや強盗を繰り返す犯罪者くらいにしかない。その選択肢の中に自分と来ることを混ぜ込めば、彼はどれを選ぶだろうか。

「……」

不意に少年が抱きかかえていたセカンドバックを開いた。

取り出したのはオートマチックの銃。

ガイルは顔をしかめる。

「それで俺とやり合うつもりか？」

「……」

少年は黙って立ち上がる。

練習の的にされる平べったい人型に向かって彼は引き金を引いた。たんたんたん、とビートを刻むように撃ち出された弾は、心臓、頭部、頸動脈を狙ったように的に穴を開けた。

「……お前、それどこで習った？」

「……」

少年は答えなかった。

ただ集中するように的を見ている。

ややあつて振り向いて瞬いた。

「……お前、口が利けないんじゃないんじやなくて」

「……」

「はんつ、なるほどお嬢も口八も人が悪いぜ」

男は自嘲気味に笑った。

少年は何か不思議そうに彼を見ていた。睨んでいるのか、と思いましたが、じつくりと観察しているのだと気付くと別に嫌な感じがしない。

ガイルは少年に手を差し出す。

こうなる事が分かっていたから、レイアは好きにするように言ったのだ。あんな何も知らないというような外見をしていて本当に彼女は人が悪い。

「お前、一緒に来るか？」

「……」

少年はおずおずと手を伸ばした。

優しく握り返すと、少年は僅かに表情をゆるめた。

例え、人殺しの道を歩ませる結果になったとしても、ガイルがこの子供を放っておけるわけがないのだ。誰に習ったのかは知らないが、危険があれば迷わず撃つように習ったのだらう。そして拳銃の整備の仕方も習っているようだ。

この子供はどちらにしても人殺しの側に来る。ならば自分の手元に置いておいた方ガイルい。

そう考えるのを知っていて彼女は好きにしろと言った。

この選択は間違いか、それとも最善か。

まだ何も分らないが、選んでしまった。

「取り敢えず、飯でも食わせるか。あーあ、面倒なもの拾っちまったなあ」

そう呟いた彼の声音は、どこか嬉しそうでもあった。

この形で実は寂しがりな所を、レイアは見抜いているのかも知れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0814s/>

帰れ

2011年3月31日15時10分発行